

聖霊会次第 目安時間(予定)
 *目安時間は天候等コンディションにより変動いたします。

12時30分	道行 舞台前庭儀	12時50分	両舍利入堂 惣礼伽陀	13時00分	衆僧入堂 樂舎揚幕 集會乱声	13時10分	振鉾 三節 (左方右方) 蘇利古 (右方)	13時35分	御上帳/御手水 樂 廻盃樂	13時40分	両舍利登高座 諷誦文・願文	13時45分	北庭樂 (左方) ①	14時00分	行事鐘 樂 十天樂	14時15分	伝供 行事鐘	14時22分	菩薩 (左方) 獅子 (右方)	14時40分	迦陵頻 (左方) 胡蝶 (右方)	14時55分	行事鐘 樂 承和樂	15時10分	祭文 樂 賀王恩	15時15分	行事鐘	15時20分	唄匿 樂 天人樂	15時30分	敬華 行事鐘	15時50分	延喜樂 (右方) ② 樂 延喜樂 讚 佛讚法讚	16時00分	梵音 錫杖	16時15分	樂 長慶子 両舍利降高座	16時20分	太平樂 (左方右方) 入調	17時00分	蘭陵王 (左方) ③ 還御	17時25分	
--------	-------------	--------	---------------	--------	----------------------	--------	--------------------------	--------	------------------	--------	------------------	--------	------------	--------	--------------	--------	-----------	--------	--------------------	--------	---------------------	--------	--------------	--------	-------------	--------	-----	--------	-------------	--------	-----------	--------	-------------------------------	--------	----------	--------	-----------------	--------	------------------	--------	------------------	--------	--



▲本尊となる聖徳太子楊枝御影がお祀りされる六時堂内陣の宮殿 (御上帳前の様子)

様々な舞楽 — 毎年異なる舞楽の解説 —

③ 蘭陵王 ② 延喜樂 ① 北庭樂

③ 蘭陵王
 一人の舞人が縦横無尽に動き舞う「走舞」の代表的舞楽です。この蘭陵王とは、中国南北朝時代後期に在った北齊国の初代皇帝高澄の従兄弟である高長恭のこと。眉目秀麗で武勇に優れ、北周国との戦いで武勳を積み重ねました。あまりに美しい容貌を隠すため、いかめしい仮面を被ったとも。舞楽の蘭陵王は、高長恭の勇敢な有様を舞にしたもので、舞人は金色に輝く龍のついた面を着け勇壮に舞います。

② 延喜樂
 平安時代の延喜八年(九〇八)に藤原忠房が作曲し、式部卿の敦親親王が作舞した「延喜樂」は宮中の年中行事やお祝い事などの儀式での慶賀の曲として「万歳樂」(左方と番で舞われてきました。舞人は鳥甲をかぶり、常装束とも呼ばれる標準的な右方装束を片肩袒で着用した姿で、合肘・披・搔・伎呂利などの手の動き、寄・落居・足立・踏などの足の動きを組み合わせてリズムカルにこの舞曲を舞います。

① 北庭樂
 北庭樂の基となった曲は、唐代の「涼州曲」や西域の風俗舞、或いは中国宮廷樂舞に於ける「北亭子」と言われています。しかしこれらの曲は日本に伝来してから絶えてしまい、現行の北庭樂は宇多天皇(亭子院)の時に大内裏にある豊樂院の不老門の北庭で再興作曲された曲です。舞は左方装束を片肩袒姿で着用した舞人が拍子ごとに返法を用いて舞い、躍動感を感じさせるものとなっています。

入調



太平樂が終了して以降は、入調となります。入調とは、法要としての舞楽が終わり、仏神に舞樂等を手向けて楽しませる為の法樂に入るとい意味です。つまり入調では、四天王寺の諸仏諸菩薩や聖徳太子、そしてご参拝して下さった皆さま方に楽しんで頂く為の舞樂となり、毎年異なった演目の舞樂が舞われます。

太平樂が終了して以降は、入調となります。入調とは、法要としての舞樂が終わり、仏神に舞樂等を手向けて楽しませる為の法樂に入るとい意味です。つまり入調では、四天王寺の諸仏諸菩薩や聖徳太子、そしてご参拝して下さった皆さま方に楽しんで頂く為の舞樂となり、毎年異なった演目の舞樂が舞われます。



迦陵頻と胡蝶は男児が舞う番の舞樂で、道行や伝供の際に参加して子供たちが舞うものです。迦陵頻とは、迦陵頻伽という極楽浄土に住まい美妙なる声を持つ鳥が由来となっており、鳥の舞という別名があります。胡蝶は迦陵頻と番となるよう、宇多天皇の時代(九〇六年頃)童相撲御覧の開催に合わせて新たに作られた舞とされています。迦陵頻は手に銅拍子を打ち鳴らしながら、胡蝶は山吹の花の枝を持って、舞われます。



菩薩は左方と右方より登壇し、大輪小輪という二人の菩薩が二重の輪を描くような所作にて舞台を廻ります。また獅子も同様に四方を押し、大輪小輪の所作を行います。菩薩も獅子もかつて舞がありました。現在は失われ石舞台上で簡単な所作をするのみとなっています。ちなみに獅子は道行の先頭をも勤め、露払いとして場を清める意味合いがあります。



聖徳太子の御目覚めをお慰めする舞樂で、聖霊会の導入部において重要な役割を持つ舞です。この蘇利古の後、聖徳太子の御影(楊枝御影)がお祀りされた宮殿の帳を上げる「御上帳」、御水を捧げる「御手水」の儀式が行われます。百済の帰化人須々許理が伝えた舞とされ、竈や井戸の神を祀る祭祀に起源を持ちます。舞人は装束束に抽象化された人の顔を描いた独特な雑面を付けます。通常は四人舞ですが、四天王寺では五人舞となります。



聖霊会の法要の場を、鉾を打ち振るって清める儀礼的な舞樂です。左方右方の双方の舞人により舞われます。三節とは左方と右方、そして双方の三度繰り返して舞う演奏法のこと、舞樂演奏の場では最初に舞われます。舞人は装束束を片肩袒で着用し、鳥甲を被り、鉾を捧げ持ちます。もとは中国古代の周の武王が黄金の鉞と白旄を手に天下平定を誓われた様子を再現した舞とされます。

重要無形民俗文化財
 聖霊会の舞樂 主要舞樂の解説
 *毎年異なる舞樂①②③については(様々な舞樂)の項目にて解説します。